



■小麦の穂肥について

2月中旬頃になると麦は幼穂形成期に入り穂肥が必要な時期となります。「イネは地力でとり、ムギは肥料でとる」と言われるように、麦作りにとって穂肥の施肥はとても大切な作業です。小麦は葉色が極端に薄くなると、なかなか元に戻りにくいため、葉色が薄くなる前に穂肥を施肥するように心がけましょう。ただ、過湿な土壌状態での穂肥施用は効果が小さくなるため、排水確保に注意してください。

穂肥・実肥の施肥時期と量のめやす(10aあたり)

品 種	穂肥1回目 【2月中旬】	穂肥2回目 【3月上旬】	実肥 【4月下旬】
農林61号	●NK-C20 (15kg) ●14 オール (20kg)	●NK-C20 (10kg) ●14 オール (20kg)	●NK-C20 (20kg) ●14オール (20kg) ●尿素 (10kg)
シロガネ	●NK-C20 (20kg) ●14 オール (20kg)	●NK-C20 (15kg) ●14 オール (20kg)	●NK-C20 (20kg) ●14オール (20kg) ●尿素 (10kg)
品種共通	●麦笑 (40~50kg)		

また、小麦のタンパク質含量と容積重を向上させるためには、穂ばらみ期以降に行う「実肥」が重要であり、「麦パンチ」等の基肥一発肥料を使用されている方についても、実肥時期の窒素溶出量が少ないため、品質ランク向上のためには実肥の施用が必要です。

■道路をきれいに使いましょう

トラクターやコンバイン等によるほ場への出入りの際、道路に泥を落として汚してしまうことがあります。作業中に付着した泥は、道路を走行する前にスコップや竹ぼうきで落とすなどして、できる限り農地内で取り除くようにしましょう。

また、道路を走行中に泥が落ちた場合についても、スコップですくうか竹ぼうきで掃くなどして、道路利用者が安全に走行できるように心がけましょう。



春まきリーフレタス

リーフレタスは、玉レタスよりも作りやすく、栄養豊富でサラダなどに人気の野菜です。春まき栽培と夏まき栽培があり、通常は苗作りから始めます。3月中旬から始まる苗作りでは、気温が低い時期なのでトンネルが必要ですが、移植をしない直まき栽培にすると、種まきの時期を遅くすることができ、トンネルが不要になります。春まき栽培は3月下旬の直まきがお勧めです。

間口60cm、奥行23cm程度の一般的なコンテナでは、株間15cmで4力所に点まきします。種は1力所に4粒まき、種が少し見える程度に土をかぶせて手で鎮圧し、適宜水やりをして、発芽するまで新聞紙などで覆います。本葉が4〜5枚になるまでに、各所1本に間引きします。育苗する場合は、先ほどのコンテナでは2条に条まきにします。浅いまき溝を作り1cm間隔で種を並べた後は直まきと同様です。発芽したら葉が触れ合う程度に間引きながら、本葉4〜5枚のときに掘り上げて、別のコンテナに株間15cmで1条植えにします。直まきも育苗も、間引いた株は間引き菜としておいしく食べられます。

手軽にできる有機ベランダ栽培

肥料は、直まきの場合は発芽後に、移植の場合は定植後に、1株当たり2つまみ(約6〜8g)のぼかし肥を与えます。その後の追肥は、20日後に同量を1回だけ行います。株がコンテナいっぱい大きく広がってきたら収穫できます。株ごと一度に収穫してもよいですが、外葉から1枚ずつかき取って収穫する方法も、少量ずつ食べるのには便利です。このとき中心から7〜8枚の葉は常に残しておかないと、新葉の発達が緩慢になり生産量が落ちてしまいます。収穫の目安は6月です。レタスに合う混植はアブラナ科の野菜です。移植栽培のレタスにはキャベツが適します。キャベツはリーフレタスと同時期に種まきをしますが、本葉2〜3枚のころにポリ鉢に鉢上げしておき、本葉4〜5枚になったら交互に定植します。直まき栽培では小松菜やルッコラを1株置きに直まきして、間引きながら収穫します。

